

令和 6 年度 自己点検評価報告書

令和 7 年 6 月 1 日公表
学校法人安見学園
板橋富士見幼稚園

□本園の教育目標

- ・明るく伸びやかな心の育ちに
- ・仲良く元気に遊べる子どもに
- ・あきらめずやり遂げる力と優しい心に
- ・しっかりとした生活習慣の習得に
- ・自信をもって話し合える子どもに

□本年度重点的に取り組む目標・計画

富士見の自然を介して、主体的自発をもって、人とかかわり遊びを広げ、豊かな感性と、力強い自信が培われる保育を目指し質の高い教育を目指します。

□評価項目の達成及び取組状況

	評価項目	評価	取り組み状況
1	教育課程の見直し改善を図る	A	◆令和6年度から満3歳児入園に伴う、幼児の姿や遊びの記録を基に、教職員が定期的に検討を重ね、初年度の保育のねらいや内容を見直し、指導計画及び環境構成の再考を行った。また、本園の教育目標にもあるよう、何を経験し、なにが学べたのかに向けて、幼小の掛け橋期のあり方についても検討を行った。幼児教育の時代の変化に伴いEQの育ちと共に、IQへの育ちの可能性についても、教師が意識化しておくことも再考する機会となった。
2	教育の質向上のために園内研修を充実させる	A	◆幼児教育センター長と教職員会において、前年度末に研修企画を行い年間7名の有識者を招き年5回の研修を実施した。幼児理解が深まり、実践に対する指導法を省察する機会となった。こうした学びの機会は、教員の自信が身につくとともに、同僚性を高め保育に対する指導の連帯感を図ることができた。
3	特別支援教育のための園内支援体制を整備する	A	◆特別支援コーディネーターを配置し、家庭や関係機関と連携しながら、定期的にカンファレンスを行っている。課題児に合った指導支援計画を成長と共に修正しながら、全教員が関わり保育を展開している。結果、課題児の成長に大きな成果がもたらされていることを全教員が共有し確認している。また、保護者からも信頼と成長への感謝の言葉や保育参観日のアンケートなどにおいても高い評価をいただいている。今後においても、課題児に対して指導法や課題児への理解を深めインクルーシブ教育を推進していく。
	教育水準向上のための取り組みとその成果	A	◆園開園日の毎日、朝の清掃及び安全点検終了後、午前8時30分から10分間、園長とのミーティングが開催される。内容は、幼児理解と

4		<p>指導法について、前日の保育を振り返る中で子どもの様子などを踏まえ、今日の取り組みで配慮することや注意すべきことなどを、レクチャーしている。また、発達個人記録簿を持ち寄り一人一人の育ちを報告する学期総括会議を3日間から5日間実施し、保育指導法について高め合い全学の保育について共有している。</p> <p>◆文部科学省・国立教育政策研究所が委託した東京大学SEDEPによる幼児期からの縦断調査の指定を受けると共に、次期幼稚園教育要領改訂に伴う実現状況の調査園の指定と合わせ、外部有識者5人による保育実践の評価を受けた。終了後一人一人から客観的評価が行われた。本園としては、全教員がこうした指定を受け、外部の有識者からの評価は保育指導の改善と自信に繋がった。</p> <p>◆本園の実践保育は、園庭の自然環境の中で四季の移ろいと共に、様々な生き物や植物の生長の変化を肌で感じ、一人一人が自然を介して主体的に遊びを生み出し、心の成長と人や生き物に対する繊細な心が培えるよう、収穫物や昆・うさぎ・鯉・亀などの飼育を通して、心豊かな人間性の育成に務めている。その結果、多様に富んだ環境を通して、積極的な遊びを展開している姿を省察する事が確認できた。</p> <p>◆昨年に引き続き、小さな田んぼを作り、お米の苗を植え、秋に米を刈り取り脱穀しお米を収穫して味わった。稲穂はイチゴの苗床として敷藁として活用するなど、自然との共生が意識できる体験を通して、共生教育に取り組んできた。幼児期の自然教育では、身近な生活とすり合わせながら、自然をいたわり、自然への保護意識を啓発し、将来地球規模で自然を保全する力となることを期待している。四季の流れに沿って、草葉（チューリップ・ヒヤシンス・クロッカスなど）の栽培や、苺の栽培、夏野菜の収穫や食への文化、そしてアンズのジャムづくり、ブドウの収穫、ゆずやミカン、米作り等年間を通じて、園庭が子ども達と共生の場所となるよう環境維持に努めていきたい。</p>
---	--	--

評価 (A 十分に成果があった A-達成できた B 少し成果があった C 成果がなかった)

□総合的評価結果

評価	理由
A	<p>全学的方針として幼児の主体的自発活動を支援したことで、幼児一人ひとりが、自分なりの好奇心をもって、多様に富んだ環境から遊びを想像し創造する活動を通して、人との関係を強く結び合い「生活の言葉」を育むことができた。こうした豊かな実体験を通して自信を身につけていく姿も見られる。さらに自然豊かな園庭で育む姿は、自立心をはじめ様々な将来に向けた生活の力を培う環境を教職員全員が意識し取り組むことができた。</p>

評価 (A 十分に成果があった A-達成できた B 少し成果があった C 成果がなかった)

□ 今後取り組む課題

	課 題	具体的な取り組み方法
1	環境保持と共生	自然環境と共生していくために、教職員が一体となって取り組む必要がある。幼児が主体的な遊びの中で、自然をどのように取り入れ自己と共生し獲得していくか に対する指導と援助の在り方について、さらに探究していくことを次年度の課題とする。
2	幼児期の育ち	日々の多様性に富んだ生活を通して、好奇心を十分に発揮し、興味関心を経て人との関係を深め合い、さらにイメージを共有しながら創造していく過程を十分に味わい、豊かな人間力の基礎を培っていけるよう、保護者や地域と連携しながら幼稚園教育課程の課題の実現に向けて、さらに取り組んでいく。
3	架け橋期	5歳児と小学校1年生との連携を図り、双方の接続期の諸問題を検討し、「主体的で対話的深い学び」の実現に取り組む。そのための具体的取り組みとして、日本国語教育学会で架け橋期のシンポジウムに参加し学び、また地域の架け橋期の連絡協議会などにも積極的に参加し、取り組んでいく。
4	アンチバイアス教育の推進	多様性社会におけるアンチバイアス教育及びダイバーシティ教育に取り組み、豊かな人間教育の基礎となるよう国際交流を介し、その精神性を育てる取組を推進する。 また、今年度は、国際幼児教育リサーチセンターの支援を受け、海外の幼稚園との二元中継を実施し互いの文化を学び合う機会を設けていく。